

---

# 秋色のもみじ

桜華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秋色のもみじ

### 【Nコード】

N4263N

### 【作者名】

桜華

### 【あらすじ】

「運命」そんなもの、本当にあるのか？

17歳の誕生日を迎えた1人の青年。変な出会い方をした転校生の女の子と関わることで変わっていく気持ち……

この想い…認めるわけにはいかねえんだよ。

## 【第一章】

### 【第一章】

この世の中に「運命」なんてあるわけない。

そんな子供だましを信じさせる大人たちは、自分自身がそれに巡り会ったのだろうか。

近頃そんなことを考える。そんな風に醒めてる俺は、今日17の誕生日をむかえる。

正直、誕生日なんてくだらない。

本人以外にはただの日常の一日だし、第一、年をとっていくことがめでたいのかさえ疑問に思う。

今日は朝から何か憂鬱だ。

嫌な予感がする。

俺はそんな予感を振り切ろうとしたが、憂鬱な気分は消えることなく、自然と重い足取りになり学校に向かった。

こういう時ほど嫌な予感は的中する。

遅刻寸前のため近道を使うと、薄暗い路地で女子がからまれている。俺はそこであることに気づいてしまった。

ーからまれている女子の制服は自分の学校のものー。

それを見て色々めんどくさくなった俺はその場で方向転換をした。た。

…もちろんそんなことが許されるわけがない。

首ねっこを掴まれ、動きをとめられる。

もともと喧嘩は好きではない方だが（理由：めんどくさいから）、

売られた喧嘩は買っていた。

ただ、今は気分が乗らないので、「すみません」とぶっきらぼうに言って俺の襟を掴んでいる手からすりぬけた。

そいつらは一瞬顔をしかめると俺に向かってくる。

まあ当然のことだが。

「っざけんな！！ナメてんじゃねえよ！！」

怒鳴り声が路地に響く。

俺は向かってくる拳をかわし、女子の手首を掴む。

そして、ひたすら走ってその路地から抜けた。

その手首を握ったまま…。

路地を抜けるといつもの通りに出た。彼女はうつむいたまま、口を開いた。

「ごめんなさい…」

「いや…別にいいけど…」

面と向かって謝られると怒りづらい。

「ありがとうございました。」

「今度から気をつけなよ？」

んじゃ、と俺はその空気に耐えきれずその場を後にしようとした。

「名前！！教えて下さい！！」

その声の大きさに驚いて振り返ると初めて彼女の顔が見えた。

白い肌に長い黒髪。大きくクリツとした瞳に真っ赤な唇。すらっと伸びる身長は170cmくらいあるのだろうか。なおかつモデルのようなスタイルだ。ナンパされてもおかしくない。むしろナンパされないなんて方がありえないだろう。

俺が黙っていると彼女は不安そうな顔をして

「ごめんなさい、失礼でした。」

と言う。俺はハッと前を向くと、口を開いた。

「いいんだけど…。そこまで感謝されるほど大したことないし…」

「でも、名前くらいは知っておきたいです。私の救世主ですから．．」

「だからあ．．」

俺は一旦そこで言葉を切った。それは長引きそうだなと感じたから。まず冷静になろうと一呼吸おいた。

そして、口を開いた。

「阪田．．．だよ」

めんどくさくなるとヤケクソになるのは俺の癖だ。

それが2人の出会いだった

ただ逃げただけ、というなんと悲しい出会いだろう。

ほら、おとぎ話のような「運命」の出会い。現実には存在しない。

そして何故か偶然に偶然が重なった。

9月2日、朝。

俺は転入生と騒ぐ周りそっちのけで寝かけていた。真夏をすぎた爽やかな風が頬をすべり眠気を誘う。

「沖田夕紀です。こっちは引越してきたばかりなので．．．よろしくお願いします。」

声にふと黒板の方を見ると見覚えのある顔があった。

白い肌と長い黒髪。くりつとした瞳に真つ赤な唇。すらつと伸びる長身はモデルのような体型を強調している。

ハツと記憶と一致した。

同時にガタンと音がして座っていた椅子が倒れ、気がついたら立ち上がっていた。

「アンタ！！朝の……！！」

途中で言葉が途切れたのは驚きなのか、混乱なのか。どちらにしても、この状況を把握しきれていないということは自分でもわかっていた。

「紅輝どーした！？」

「一目惚れかあ？？」

周りからはもちろん声が飛び交う。

「サ、サカタくん……！？」

彼女の驚いた顔がなんとなく目に焼き付いた。

「で、どういう関係なわけ？？あの沖田さんと。」

当然あれだけ目立てば取り調べを受けるわけで……。

「朝、あの子がからまれてたんだよ。だから一緒に逃げたの。」

「なんだと！？お前はどうしてそうモてるんだア！！」

素直に答えても、この反応だし。

「いや別に今の話題モテるとか関係ねえよ。てかそんなにモテてねえよ。」

「いーやつ、断然トップだろ！」

「何のだよ。てか何で競ってたんだよ」

こいつのテンションにはついていけない……。

こうやっていつもツツコまされる。

別にイヤじゃないのだけど。

「クスッ、つまり紅輝は運命の出会いをしちゃったわけだ。」

「バーロ……。瑞樹、そんなありえねえよ。ただ偶然に偶然が重なっただけだ。」

「でも、偶然って何回も続くもんじゃないでしょ。何回もあつたら偶然って言わくない？」

うつ……。確かに……。

返す言葉が見つからない。俺の親友の瑞樹は揚げ足を取るのがとても上手い上に的確なツツコミを入れてくる。

俺の唯一の天敵だ。

スキを見せられない。

だが俺と瑞樹の他に最初に話していた葉太は3人の中で一番バカだ。だからスキを見せても問題ない。

「俺沖田さんトコ行ってくる！！」

急に立ち上がった葉太に、俺らはひらひらと手を振った。

「行つてらっしゃーい」

葉太は彼女のトコに走って向かった。

周りは女子ばかりだ。

沖田夕紀は楽しそうにしている反面、少し戸惑った様子でもあった。

葉太がその中に入ると女子たちも一層盛り上がった。

葉太は結構女子からも好かれている。

沖田夕紀は葉太を見て笑っていた。

「俺やばいっ！沖田さんとめっちゃ仲良くなったわ！」

「ヨータ見て笑ってくれてたもんね」

「そーそー！笑い方がカワイくてさあ。」

帰り道、いつも通り自転車に乗りながらくだらない話をしていた。

ただいつもと違うのは話の内容が女のコトだった。

俺はそういう話は好きじゃない。だから

「じゃあな」

と言うといつもの曲がり角をまっすぐ進んだ。

「あれ？紅輝こっちなじゃないの？」

もちろんそんな瑞樹の声が聞こえないわけじゃない。

ただ、こっちなじゃなきゃいけないような気がして。

惹きつけられるように勝手に足が進んでいっただけ。

なぜかわからないけど…。

あの黒髪が風になびいている。

その長い髪がサラサラしているのは遠くから見てもわかる気がする。

彼女は何故か立ち往生している。

あまり関わりたくないというのが本心だが、困ってるヤツをほっとけるほど情がないわけじゃない。

俺は勇気をだして声をかけた。

「沖田．．さん??」

「あつ！サカタくん!？」

その笑顔はやっぱり憎めない。大人っぽい綺麗な顔立ちなのに、笑うとどこか幼さを残した無邪気な笑顔になる。

昔大好きだった女の子を思い出した。その子もそんな笑顔だった。

「どうしたの？」

「道に．．迷っちゃった。」

「．．どこ??」

少しため息まじりに言ってみせた。

その声の冷たさに自分でも驚いた。

すると彼女は涙目になって

「いいよいいよ！１人で行くから！」

すぐくあせった様子になった。

「怒ってないから言って？」

俺は軽く深呼吸して冷静になり、静かな声で聞いた。

涙ぐまれると俺が悪いみたいだ。

「西町の夕陽ヶ丘．．」

俺んちの方だ。

てかすぐ近くだ。

「でもやっぱり悪いし、いいよ！」

「いいから黙ってついてこいて！」



今思うとよくもまああんなこつぱずかしいことをやったもんだ。

そして俺は、沖田夕紀を後ろに乗せて自転車をこいだ。

沈みかけた夕日の方へ・・・。

赤く染まった町の中で、彼女の頬もまた赤く染まっていたことに俺は気づかなかった。

## 【第二章】（後書き）

初めまして、桜華<sup>おづか</sup>と申します。

私自身運命の出会いとかないので最早これは夢…ですかね（笑）

これから頑張って投稿していこうと思います！！

感想などよろしく願います（＾・＾）ノ

## 【第二章】

### 【第二章】

ガチャッ

玄関扉の閉まる音がリビングに響いた。

「おかえりー」

母親と姉の声だ。

何やらニタニタしている。

まさか．．．！！

「ちよつとあんたいつの間に．．．」

「こら紅羽！」

姉の言葉を母が遮る。

ああ．．．もう完全にはれてる．．．。

「そー言えばさー．紅輝はー．彼女とかいんの？」

2人は目だけを横にやり、上目使いをしてくる。

この人たち絶対隠し事向いてない。

「アレ彼女でもなんでもないから。」

俺はそう言い捨てると、階段を上っていった。

背中に母と姉のガツカリした声が聞こえる。

見られてた．．．

俺はバタツとベッドに倒れ込んだ。

沖田夕紀を後ろに乗せて自転車をこいでいるところを．．．

俺は何でそのことを考えなかったんだろう。

あの時間は姉が帰ってくるのに。

まあ必死だったから仕方ないか．．．

俺はむくつと体を起こした。

何で必死だったんだ．．??

2ヶツするのは初めてでもないし、瑞樹と葉太2人を乗させられたこともある。

女だつてあるし．．

俺は答えを見つけたのが怖くなった。

何故か気づいちゃいけない気がしてならなかった。

俺はベッドから下りるとカバンの中を探った。

「あれ？」

思わず声を出していた。

携帯が見つからない。

その上見たことのないモノが入っている。

電気を付けていなかったから部屋は薄暗く、そのモノが何なのかわからない。

俺は電気のスイッチに手を伸ばした。

その不思議なモノは2つ入っていて、1つ開けてみると中から財布が出てきた。

一緒に入ってたカードには

h a p p y   b i r t h d a y

f r o m   不二   山崎

と書いてあった。

不二というのは瑞樹の名字で山崎は葉太だ。

そつか．．今日は誕生日だった．．。

じゃあこの袋は．．??

中を開けると結構な量のキャンディが入っていた。

この袋のカードには、

突然すみません。

今日阪田くんが誕生日だと不二くんたちに聞いたので大したモノじゃないんですが、一応プレゼントです。  
今朝は本当にありがとうございました。

沖田夕紀

と書いてあった。

袋やカードが同じところを見ると学校で俺がいない間にやったのだろう。

お礼くらいさせてくれりゃ良かったのに、アイツらも沖田夕紀もー。

よく見ると携帯もカバンの奥にあった。

開いてみると新着メールが24件。

「はあ!？」

俺は叫んでしまった。

イタズラでもない限りこんなにメールが来たのは初めてだ。  
というかイタズラでもこんなだけ来たことはない。

呆然と携帯の画面を見つめていると、また新着メールが来たようで、手のひらが震えた。

そのメールを見てみるとクラスの女子だった。

他も全部クラスのやつらからだった。

ー誕生日も悪くないかな。

なんて俺はガラにもないことを思ってみた。

やっぱり今日の俺は少しおかしい。

「昨日はサンキューな」

俺は朝一で2人にお礼を言った。

「あれ？珍しいじゃない。紅輝が素直にお礼言うなんて。」

瑞樹にバカにされるのは目に見えていたが、ここまで冷静に茶化されると少し腹が立つ。

「いや、何も言っていないのに買ってきてくれたし。．．．その．．．嬉しかった。」

「明日台風でも来るのかな!？」

さりげなく言ったのは葉太だ。

決してイヤミで言ったわけじゃないことは知っている。

葉太は瑞樹と違ってそんなイヤミを言うやつじゃない。

というかコイツは皮肉とかそういうの思いつかないはずだ。

「俺の友達ってさりげ失礼じゃない？」

俺はボソツと言うと、少し笑った。

「おはよー」

「あ！沖田さんおはよー」

沖田夕紀の声に一番早く返事をしたのは葉太だ。「おはよー」

瑞樹も言葉を返す。

瑞樹と沖田夕紀はこっちをチラッと見てくる。

葉太は自分の世界に入っている。

「．．．はよ」

挨拶なんて慣れない俺は聞こえないようにボソツと言ったが、ちゃんと聞こえていたみたいだ。

2人はニコツとして、葉太はビックリしたようにこっちを見た。

「今、紅輝あいさつした!？」

「したねー」

「しましたねー」

瑞樹と沖田夕紀は葉太の失礼な質問に同時に答えた。

：薄ら笑いを浮かべた同じ表情で。

この時まさかクラス全員がこっちを注目していたなんて、予想も出来なかった。

「そついえば紅輝、お礼は何くれるのかな？」

「はあ！？何でだよ。誕生日に返すじゃダメ！？」

俺は瑞樹の唐突な質問に少し戸惑った。

「それでもいいけど…ねえ」

瑞樹は2人の方を向くと笑って見せた。

2人も笑顔を返す。

「沖田さんにあげるの抵抗あるでしょ」

「う…」

「だから軽くお茶でもおごってもらおうかなって話してたの」

「…そしたらチャラだよな？」

「もちろん！」

3人でハモれるなんてもう完全に仲良くなってるし。

てか葉太は沖田夕紀のこと好きなんだよな…??

これってチャンスなんじゃ…。

「日曜の十時、23条の駅にしようぜ。」

「あれ？何か珍しく張り切ってない？」

そりゃ…まあ…。

親友（お前）の恋が実るチャンスだし。

「ま、いーや。行きたい店あるから当日はソコで。」

葉太に行きたい店？！

「沖田さん女の子1人だよ？誰か誘っちゃえば？」

「え…大丈夫なんですか？」

はあ！？何を話してんだアイツ！

「俺が破産するからダメ！」

「だってさ」

笑いに包まれた。

今までと違う感覚。

だけど嫌じゃない。

「ヨーくん！！」

何かちっさい女子が教室の入り口で誰かを呼んでる。

俺らのクラスにヨウなんていたっけ??

「はい！」

ガツと立ち上がった葉太は教室入り口の女子へかけよった。

「ええ！？」

俺たち3人は思わず大声を出していた。

もちろん周りも気づいている。

「……で……うん……ありがと……そう」

会話は途切れ途切れにしか聞こえない。

「……今の……誰？」

「ごめんねー、と戻ってきた葉太に沖田夕紀は恐る恐る聞いた。  
すると葉太は照れくさそうに頬を赤らめると

「んー、カノジヨ。なっ？」

なっ？つて……

「初めて聞いたから……」

俺と瑞樹は声を揃えて言った。

俺はただ、呆然としていた。

「あー！ごめんごめん。ついこないだ告られてさ、実は俺もあのコ  
きになってたし。」

「へ、え……」

言葉が出てこなかった。

あのちっさいのがヨータのカノジヨ……。

てかじゃあ沖田夕紀は！？

「おい！！！」

教室に予鈴が響いた。

俺の声が入ってきた教師の声にかき消された。

教室の片隅に固まっている女子の噂話はいつものことだー。



「ねーねー、俺思っただけだ。」

放課後、瑞樹がハツと思い出したように言った。

「沖田さんと紅輝、家が近いならコレからみんなと一緒に帰れば？」

「はあ？」

「いーじゃん、どーせ帰宅部だし」

「あたしは別にいいよ。」

「沖田夕紀!？」

「いいじゃん! 決まり」

「おいっ待て！」

「しかとー」

瑞樹はそう言っただけで俺に近づいてきた。

「男がいつまでも引きずるモンじゃないよ。」

耳元でそうささやくと、鞆を背負った。

何も言い返せなかった。

俺はもう誰も好きになんねえ。

女には近寄らねえ。

俺の時を示す針は止まったままだった。

見える景色もあのころのまま…。

「悪いけど、俺今日ちいと帰るわ」

葉太の声にハツと我にかえった。

「ちい？」

瑞樹と沖田夕紀の声が重なる。

「カノジヨでしょ」

「へへっ」

俺が聞くと葉太は照れくさそうにそう言って教室を出ていった。

それを見ていたクラスの女子は何やら小声で相談し、教室を出てい

った。

沖田夕紀はそれを見ていた。

俺らも帰るかーと話していると沖田夕紀が

「ちよつと待って」

と遮った。

そして鞆も持たずに教室を出ていった。

俺はその時の険しい沖田夕紀の顔を見て、嫌な予感がした。

「よーたーくん。」

こんなに走ったのは久しぶりだった。

けど今はそれどころじゃない。

「夕紀ちゃん?! どうしたの!? そんな息切らして……!!」

「……彼女……さんは?」

「まだなんだよね……遅いなあ」

ーヤバい。

あたしはまた走り出した。

「夕紀ちゃん?!」

クラスで固まっていた女子たちの会話。

いつも葉太くん、瑞樹くん、阪田くんの3人の話だった。

今日の朝、あの子がきた途端から急に険しい顔を始めた。

それで葉太くんが教室を出た直後にあの人たちは走った。

あの子が危ないー!!

あたしは考えながら走ってたから思わず見落としそうになった。  
いた!!!

中庭……。靴に履き替えて向かってたんじゃ時間がないっ。

「ねえ!!!」

思いつきり叫んだ。

人が通らないここにあたしの声は虚しく響いた。

ガラスの向こうまで届かない。

でも…あの人たちはあたしに背を向けてるから気づいてないけど、「ちい」はあたしに気づいてる。

ガラス戸が開かないのを確認してあたしはまた走り出した。

そしてすぐに立ち止まり部活組の靴を借りて窓の外へ飛び出した。

あたしに靴を貸してくれた人たちは、ビックリしたように体育館へ向かっていった。

あたしは走ってちいのところへ行った。

「ねえ葉太くんと別れなよ」

あの人たちの声が届いた。

「嫌…です…」

ちいの声もする。

ちいやあの人たちの姿が見えたけどあの人たちはあたしに気づいてない。

「あんたみたいなチビ、ふさわしいと思ってんの!？」

怒鳴り声が響いた。

あたしの足は自然に動いた。

「やめなよ!!」

止めに入ったあたしは自然とちいをかばっていた。

「そんなん葉太くんが決めることでしょ。葉太くんもこの子のこと好きなんだからいいじゃない。悔しかったら自分で告白すればよかったんじゃないの？」

スラスラと言葉が出てくる。

「はあ!？何しやしゃってんの!？正義の味方気取り!？」

「黙っておとなしくしてなよ」

「てゆーかあんたもム力つくんだよね。あの3人とベタベタしすぎ。」

「

「あの3人？」

空気読めてないことくらいわかってる。

けど何で別のことでキレられてんの??

「は??知らないのにあんな仲良くしてたの??」

「あのイケメントリオだよ」

イケメン??ますますわからないよ。

「王子さまな瑞樹くん、かわいい弟系な葉太くん、そしてクールなのに3人でいるときの笑顔がたまらない紅輝くん。」

「ええ!??」

「何よ。」

「わかった!??あなたは確かに顔がいいけど、あの3人には近づかないでちょうだい」

「それはイヤ。」

自分でもびつくりした。

「何であんたたちに友達まで制限されなきゃいけないの!??」  
声を張り上げていた。

“あの日”と同じ言葉を繰り返した。

「何言ってるの!??」

怒って手を振り上げた。

あたしは背中の中のちいをギュツとつかんだ。

「叩かれる...!!」

パシッ。

あれ??

恐る恐る目を開くと誰かがあたしの前にいた。

よく見るとたまたまこうとしたあの人たちの手を止めている。

「女って怖えー。やめた方がいいよ...。」

あの人たちは顔を真っ赤にして走り去った。

てゆーかこの声は...

「阪田君...??」

今になって腰が抜けた。

「あ、大丈夫だった？てか彼女さんは葉太のトコ行ってあげて。」  
コクつとうなずくと涙ぐんでお礼を言った。  
そして走ってげた箱まで行ったようだった。

「阪田くん…何で…??」

「んー??気になったから。」

と言うとあたしの手を引き立ち上がらせてくれた。  
鞆も持ってきてくれたみたいだった。

ムチャすんなあコイツ。

俺はただそう思った。

「帰るぞ。靴返してこい。」

沖田夕紀はビックリしたように問いかけてきた。

「何でわかったの!？」

というと体育館の方へ走っていった。

夕日がすごくきれいで、俺の目に焼きついた。

時計の針は静かに動き出し、止まっていた風景もいつしか変わり、  
沖田夕紀の笑顔が頭から離れなかった。

## 【第二章】（後書き）

ども、連続（？）投稿してみました桜華です。

とりあえず…

受験生だけと頑張ります

### 【第三章】

#### 【第三章】

「へー、紅輝が助けに行っただー。急に出てくから何事かと思っ  
たよ。」

「ほんと悪かった!!」

結局あの後、瑞樹を忘れて沖田夕紀と帰ってしまった。  
反省して瑞樹に電話したら案外あっさり許してくれた。  
理由を聞いても答えてくれなかったが。

「で??何か進展あったの??」

「は??」

唐突な質問を飲み込めないままだった。

「沖田さんとなんかあったかって」

「何もないよ...あ!でも下の名前で呼ばれることになった。」  
「紅輝から呼んでつていったの??」

まさか。ありえない。

確か帰ってる最中に沖田夕紀が急に止まって、

「阪田くん、あたし思ったんだけど。」

といった。

当然気になるわけで聞き返したら、

「あたし阪田くんだけ名字で呼んでる。」

「そうだね。」

俺は何を言い出すかと思っていたから急に気が抜けた。  
また歩き出すと、ちこちこ着いてきた。

「下の名前で呼んでいい??」

何を今さら…。

ぶっちゃけ激しくどうでもよかった。

「好きにしなよ」

「…わかった。」

コイツ変なところで気い小せー。

あんなムチャしたくせに…

沖田夕紀は静かに笑っていた。

「紅輝…??」

「あつ！わりい…」

ぼーっとしてた俺は瑞樹の声でハッと我にかえった。

「そっぴゃー、沖田夕紀がなんか敬語使わなくなった気がするんだけど。」

「あつそれ俺が言ったんだ。タメ語でいーよーって。やだった??」

「いや全然…」

「んじゃーそろそろ切るね。じゃーね」

「ああ…」

もう女には近づかないって決めたのに。

沖田夕紀がどんどん近くなる。

また誰かを失うのが怖い…。

「紅輝。ご飯」

俺は部屋の電気を消した。

そして真っ暗な部屋に悩みを残したまま静かに戸をしめた。



それから俺はしばらく心にぽっかり穴が開いたようにぼーっと過した。

気持ちは誰かに伝えなければなかったことになるのだろうか。

誰にも伝えないままだったら何も変わらないですんでいたのだろうか。

真っ黒な空を見上げてても星なんか見えない。

俺はどうしたいんだろう。

沖田夕紀と仲良くなれるほど過ちは小さくない。

償えるほど傷は浅くない。

誰か助けてー。

「紅輝、誰か呼んでる。」

「あ??」

俺を呼んでるのは見知らない女子だった。

「コレっつ。読んでくださいっつ」

渡されたのは封筒だった。

そしてその女子は走って行ってしまった。

「へへ。まだラブレターなんてもらうんだ」

「ねへ。もう高2の秋なのに。」

瑞樹と葉太の顔が教室の入り口から半分出てる。

「紅輝、それ貸して。」

こういう手紙をもらったときはいつも瑞樹と葉太に渡している。瑞樹や葉太がもらったときは俺もみる。

「やっぱ紅輝はモテるねえ」

「葉太ほどじゃないよ」

葉太や瑞樹の方がモテるはずだ。

「てか俺も言える立場じゃねえけどこういうのってみない方がいいんじゃない？」

「確かに紅輝が言える立場じゃないよね」

は？ “確かに” の位置間違ってるだろ！

「でもすごいよねえ。俺は告白なんて絶対できないなあ。」

「ホント。ここまでストレートに書かれると読む方も照れちゃう。」

……？

3人の中に一瞬の沈黙が流れた。

「沖田夕紀！？」

「あ！ごめん！見ちゃだめだった？」

「今日遅かったね。どうしたの？？」

瑞樹は何事もなかったかのように冷静で沖田夕紀に返事をする。微妙に話が噛み合っていないが。

「…寝坊しちゃった。」

「へえ。」

沖田夕紀のその言い方になにか違和感を感じた。

どこかいつもと違うような…そんな何かが引っかかった。

「紅輝くん……？」

「あつ……」

ハッと気がついた。

「どうしたの？紅輝最近ボーっとしてるね」

「…疲れてんのかも。今日帰るわ」

「昼ご飯は？」

「いいや。」

「あ、日曜ね。」

「おー」

昼前の家には静けさが広がっている。

当たり前か。誰もいないし。

「はあ...。」

ため息がこぼれる。

ベッドになだれ込むと自然と眠ってしまった。

夢を見た。

俺は深い暗闇の中にいて、走っても走っても風景が変わらない。

ドコを見ても真っ暗で、手に持っている時計の針は止まっている。

光なんて許されない。

頭の中にぐるぐる回るその言葉。

ハッと目を覚ましたら、汗をかいていた。

この時期汗をかくなんてありえない。

夢のことはうる覚えだった。

なのに鮮明な恐怖だけが頭からはなれない。

ピンポン。

インターホンが部屋に響いた。

時計を見るともう15時を指していた。

どれだけの間、寝ていたんだろう。

「はい。」

「紅輝？俺。」

「瑞樹？ちよつと待つて。」

ガチャツとドアを開けると3人の姿があった。

何故かすごく安心した。

恐怖の渦はまだ抜けない。

でも、心が楽になった気がした。

「おじやます。」

「あたしまで来ちゃってよかったのかな？」

沖田夕紀は玄関先で戸惑っている。

「いいよ。別に。」

だってもうイヤじゃない。

いつから？

急に頭痛が走った。

俺は痛みあまりその場に座り込んでしまう。

「紅輝くん！？」

沖田夕紀の声がスゴく苦しかった。

俺はいつからコイツがイヤじゃなくなった？

俺はいつからこの3人がいて安心感を覚えるようになった？

わからない。

沖田夕紀が俺の中に入ってくる度、俺の中にヒビが入る。

近づくな。

これ以上…。

「紅輝???大丈夫?」

ふと目を開けると見慣れた天井だった。

瑞樹や葉太、沖田夕紀が心配そうに俺を見ている。

「部屋まで運んでくれたのか…」

「俺と瑞樹で。対処の仕方は夕紀ちゃんが教えてくれたんだ。」  
「悪いな。」

「気にしないでよ。友達何だから当たり前だよ。」

「じゃあそろそろあたしたち帰るね。」

「…悪かったな。」

友達…。

沖田夕紀はいつから？

会った時から？

俺はまた睡魔に襲われて、眠ってしまった。

「紅輝…大丈夫かなあ」

「心配だね。」

「うん」

あたしたち3人はとぼとぼ歩いていた。

紅輝くんが目の前でしゃがんだ。

熱もないし、ただの疲れからくる頭痛だと思っただけ…。

あの汗は尋常じゃない。

何かにうなされてるような…。

あたしは前を歩いている人たちにぶつかってしまった。

「あ、すみません」

顔を見上げた瞬間、一気に血の気がひいた。

「あ？…沖田！？」

「うそ！！まち！？」

「へえ〜??」

コイツら…。なんで…!？

「いなくなっと思ったたらこんなトコにいたんだ。」

「どうりで見つからないわけだあ。」

「また来ようかなあ。まあその時はよろしく。」

「あ……」

声が出ない。

恐怖？驚き？

あたしは自然と瑞樹くんの腕を掴んでいた。

「……あ！……ごめん。」

パツと手を離すと、瑞樹くんはニコツと笑ってくれた。

「今のガラ悪そうな人たち誰？知り合いみたいだけど……」

確かに、1人は明らかにガラ悪い。

もう1人は制服だけど死ぬほどスカート短いし、最後の1人はどうなんだろう。

タバコくわえてるくらい？

ま、良くないか。

てか堂々と犯罪……！

「ちよつとだけ、知り合い……。」

「そうなんだ……」

瑞樹くんは心配そうにしていたが、あたしはニツと笑って家に帰った。

「ありがとね。」

「ううん……」

2人の背中を見送って、門をしめた。

「ねえ瑞樹、俺思ったんだけど、あの人たちに夕紀ちゃんいじめられてたんじゃない？」

「……俺もそう思う。」

「紅輝、もう大丈夫？」

「ああ…うん。迷惑かけたな。」

「いいよ。友達だろ??」

日曜、俺は約束通りおごらされる。

頭痛は治ったが頭のモヤモヤが抜けない。

「沖田さん遅いね。」

「まさかあの人たちに絡まれてるんじゃない？」

「あの人たち…?」

そして俺は葉太や瑞樹から一部始終を聞いた。

俺は気がついていたら走っていた。

こんなこと何回目だろう。

隣には2人がいる。

友達を助けに行くのは当たり前だろう。

もう沖田夕紀だって友達。

それは変えようのない事実だってことはもうわかっている。

そして俺は沖田夕紀の姿を見つけた。

しかしそれはいつもの沖田夕紀なんかじゃない。

「いい加減しつこいんだよ!!」

路地裏、信じられない光景が広がっていた。

沖田夕紀がゴミ箱を蹴り、相手の胸ぐらを掴んで持ち上げている。

「ここはてめえらが来る場所じゃねえんだよ!」

そういうとその女を投げ捨てるように、地面へ落とした。

「相変わらずの腕前じゃねえか」

「戦い方はちつとも変わらないんだあ」

「相手の血は見ない。あたしらには出来ないよ。」

「ウルサイ。失せな。今すぐに、だ」

そういうと3人はいなくなってしまった。

誰が誰をいじめたって…？

そんなのウソだろ。

そして沖田夕紀はこっちに気づいた。

「見てたんだ…」

沖田夕紀の顔はどこか寂しそうで、今にも涙があふれそうだった。

「話、聞きたいな。」

瑞樹がただそれだけを優しく、でも強く言った。

そして約束していたカフェで話を始めた。

葉太が行きたい店というのはここで、どうやら葉太の彼女がバイトしていたみたいだ。

「何から聞こうか悩むけど…」

一番始めに口を開いたのは瑞樹だった。

でも俺はそんなに優しく聞けない。

「沖田夕紀は悪くない。でもあの人たちとどういつ関係なのか聞きたいんだけど。」

少し口調がキツくなっていた。

「…あの人たちとあたしは前につるんだの。」

口を開いた沖田夕紀は今にも泣き出しそうだった。

沖田夕紀以外誰1人、しゃべらない。

周りの客の声も聞こえないくらい俺は沖田夕紀の声を探した。

「あたし…前にちいちゃんみたいにされた時があったの。」

「え…？」

ちいは葉太の彼女。

ってことは女子に呼び出されたってこと？



でもあんなヤツらとつるんでたら女子も絡まねえだろ。

「中学の時、学年で結構モテた男の子に告白されて…。しかも付き合ったなんて噂たてられちゃって。女子に呼び出されるわ、親友にその人のこと好きな子がいて絶交されちゃうわ。クラスしてきたの。」

「…かわいそう…」

瑞樹も葉太も同情している。

でも俺は納得いかない。

「バツカじゃねえ？確かに最初に誤解されたのは気の毒だったと思うけど、高校行つて噂流されたのはそれだけのコトしてたからじゃねえの？最後に決めたのはお前自身じゃん」

俺はガタツと立ち上がって、千円札をテーブルの上におくと店を出た。

正直がっかりした。

あいつがあんなヤツらとつるんでたことも、それを黙ってたことも、別にもういいけど。

沖田夕紀なんて初めから…。

「紅輝くん!!」

そう、初めから…。

俺を呼ぶ声はいつも大声。

「あたしつ、紅輝くんたちを騙してたわけじゃないの!」

知ってる…。

わかってる…。

でも…

「騙されたとは思えないから」

振り返りもせず言い捨てた後、沖田夕紀の涙がこぼれたのは見なかった。わかった。

だけど、今は冷たくすることしかできない。

俺のためにも、沖田夕紀のためにも…。

「沖田さんっ…」

「瑞樹くん…」

俺は知らなかった。

瑞樹が沖田夕紀に想いを寄せていたことに。

瑞樹は夕紀の涙を見ると、背中から優しく抱きしめた。

夕紀も抵抗なんてしなかった。

「瑞樹くん…?」

「あんな冷たいヤツより俺にしときなよ。」

「え…!?!」

夕紀と瑞樹の時計の針は確実に時を刻み始めた。

もしも…

世界が変わったなら

あなたを好きじゃなくなるのかな

わたしを好きだといってくれた人を

好きになれるのかな

もしも…

世界が変わっても

あなたを好きでいられる自分はいるのかな

世界が動いた…

「俺ら…コレで終わっちゃうのかな…」

外をぼんやり眺めていた葉太はぽつりと呟いた。

### 【第三章】（後書き）

今回：話がいろいろと絡んできました。

感想や誤字脱字がありましたら報告よろしく願います！

それと、ストロボ・エッジと高校デビューにハマりすぎました（笑）

もしよかったらオススメの少女マンガがあつたら教えてください。

## 【第四章】

### 【第四章】

不器用でごめん  
素直じゃなくてごめん

キツイセリフが

君を傷つけても

生易しいコトバで

君を悩ますよりかは

ずっといい

これが僕の

精一杯の優しさ…

「…くそっ」

俺は拳でベッドを打ちつけた。

素直に許せないもどかしさ

裏切られたことのあっけなさ

きつと沖田夕紀は悪くない。

俺が強く当たったのは何も相談してくれなかったことの寂しさからの八つ当たりかもしれない。

それから…、俺の周りはまた何もなかったように3人の生活に戻った。

コレで良かった。

初めから、何も変わっていない…。

何も…。

本当に？

は？

何も変わってない？

ウルサイ…！！

ほんとに何も変わってないんだよ…。

気のせいかな最近、瑞樹の口数が少ない。

こうして3人で遊びに来て、何故か黙りこくっている。

「…どうする？」

葉太がこの気まずい空気に気づいたように口を開いた。

「…」

俺も瑞樹も反応しない。

「俺服買いたい店あるんだけど、そこ…」

「俺さあ」

葉太の精一杯な言葉を遮ったのは瑞樹だった。

俺も葉太も瑞樹の方を見る。

「俺、沖田さんのこと好きなんだけど」

「え…！？」

瑞樹の唐突なセリフに俺らは思わず聞き返す。

「こないだ告った。」

「はあ??」

「いつ??」

「“あの日”。」

あの日…。

やけに胸に刺さるその言葉。

「好きな人いるってフラれたけどね」

「へえ」

別に興味ないけど。

「へえってそれだけ??」「は?」

「いい加減卒業したら? 俺言っただよな? 過去のこと引きずりすぎんのもどうかと思う」

「意味わかんねえから。お前何が言いたいわけ?」

俺は気づいていた。

瑞樹が何を言っているのか。

でも俺にはどうしようもない。

気づかないフリをして自分をごまかすしかなかった。

「俺、紅輝は気づいてないっていうより、考えようとしてないって気がする…」

「葉太まで何言ってるんだよ…。お前ら2人そろって意味わかんねんだよ。」

俺はそのまま家に帰った。

次の日1人の女子が俺らがたまってる席へ来た。

「阪田くん。これ委員会のなんだけど、こないだの委員会来なかったからプリントね。」

「あ、サンキュ」

「…うん」

何故かその女子はびっくりしたようだった。

「紅輝が優しくなったからじゃないの?」

「はあ?」

「前に比べてなんか雰囲気柔らかくなったもん。夕紀ちゃんがきてからかな。」

「…!」

俺はその名前を聞くと口を利けなかった。

葉太もハツと気づいたように自分の口を抑える。

何とか仲直りした、というかケンカも何もしていなかった。

「あ、ごめん!!」

「…」

「いいんじゃない?」

やっと喋ったと思った瑞樹は不機嫌だった。

最近ずっと機嫌が悪いようだった。

「紅輝、沖田さんに甘えすぎじゃないの?それに何回言ったらわかるの?過去のことまで引きずりすぎ。」

「あ?」

「沖田さんの気持ちも考えなよ。」

「は?どういう意味だよ」

「ほんとに気づいてないの!」

「意味わかんねえんだよ!!」

「そこまで鈍感なのも病気だね」

瑞樹はそう冷たく言うとうとう教室を出ていった。

その様子をずっと見ていた葉太も眉をしかめて俺を見た。

「俺は瑞樹みたいにキツク言うつもりないけど、紅輝が変わったのって夕紀ちゃんがそばにいてくれたからでしょ?夕紀ちゃんの気持ちも大切にしなきゃだめじゃないかなあ。」

葉太も教室を出ていってしまった。

「…」

狂い始めた世界が俺の心の傷を広げる。

俺はどうしたい…??

紫乃…答えてくれ。

君を守れなかった俺が、あいつの気持ちを考えられるわけない。

「…紅輝くん…」

その様子を見ていた夕紀はぽつりと呟いた。



知南は夕紀が呟いたのを聞いていた。

「夕紀ちゃんは阪田くんのこと好きなんだよね？」

「え！？何で！？」

「何でって違うの？？」

知南はびつくりしたように問い返す。

「ちいちゃんは鋭いなア……」

夕紀苦笑いを浮かべながら、知南の方を見た。

「いつから？」

知南が問いかけると、夕紀は首をかしげてみせた。

「結構始めから好きだった気がする。」

「悩む必要ないんじゃない？好きでいていいと思う。」

「でも、紅輝くんが……」

「今阪田くんの気持ちは関係ないよ。夕紀ちゃんは阪田くんのこと好きなんだよね。そんなコト誰かに何か言われて取り消せるかなあ？」

「たぶんムリ。」

「でしょ。阪田くんがどう思おうと人を好きになるのはどうしようもないことなんだから、気にしなくていいと思う。そこまで脈ナシに思えないし。」

「え……？」

夕紀は驚いたように知南の顔を見た。

「普通、あんま興味ない人にあそこまで怒らないよ。阪田くんなんて特に感情表現がヘタクソだってヨークン言ってたよ。それに裏切られたと思うのは夕紀ちゃんのことをそれだけ信じてたからじゃないかなあ。何にしても悩んでるヒマはないよ。ガンバレ。」

「……アリガト。そうだよ。行ってくる。」

知南は夕紀の背中を笑って見送った。

気づいたら知南の隣には葉太がいて、「ありがと」と知南に伝えていた。

俺は珍しく怒っている瑞樹を見て、少し気まずくなった。  
葉太もあまり元気がない。

俺はその空気に耐えられずに、教室を出た。

「紅輝くん」

今最も聞きたくない声が俺の耳に届いた。

「何？」

そう言った俺の目は前の誰も寄せつけることのないものになっていた。  
た。

自分でもわかつている冷たい声も沖田夕紀を涙目にさせた。

「あ…あたしっ」

俺はストップをかけた。

そこで大声で話されても困る。

そして廊下よりはあまり人のいない休憩所へ行った。

俺は自動販売機のボタンを押しながら、沖田夕紀に問いかけた。

「で、何？」

「…」

確かにあんな勢いで来たのを止めてしまったら言いづらいだろ。

「んじゃ、また今度でいい？」

「待って!!」

その声に振り返らずに足を止めた。

「あたしっ本当に紅輝くんたちを騙してたわけじゃないの…。  
だ、言いそびれちゃって…。」

沖田夕紀もずっとそのことで悩んでいた…。

俺が考えていたよりずっと…。

「そんなの知ってる。」

思わずぽつりと言ってしまった。

「え？」

当然のごとく聞き返される。

「沖田夕紀がつ、俺らを騙してないってことくらいわかってる。ただ納得いかなかったんだよ…」  
めんどくさくなるとヤケになるのは俺のクセだ…。

初めて会った日から、ヤケになるほどめんどくさいヤツ。  
でもいやじゃない。

これが自然になるほど大事なヤツだった。

沖田夕紀は何故かこっちを見ている。

「ん？何？欲しいの？ストロー開けちゃったけど。」

物欲しそうな顔をしている沖田夕紀に買った飲み物を差し出した。

「違うよっ」

「あ、いらないんだ。てかさろそろ戻りたいんだけど。」

「いるっ欲しいっ。」

沖田夕紀は手を出した。

俺はレモンティーのパックと外したストローをわたした。  
沖田夕紀は受け取ったものの飲もうとはしなかった。

「あ、沖田夕紀に言おうと思ったことがあるんだけど。」

「え…？」

「俺もう沖田夕紀と仲良くできねえから」

ジュースの落ちる音が耳に届いた。

これが俺の答え…。

沖田夕紀を泣かすことになっても取り消さないと決めた。  
これで良かった。

これで…良かったんだよな、紫乃…。

俺は静かにその場を後にしようとした。

時計の針を逆の向きへムリに進めてしまった。

このまま進めてしまったら俺は、またコイツと仲良くなる。

俺はもう決めたんだよ…。

女とは仲良くならねえって。

「あたしっ！！紅輝くんと仲良くなりたいですっ」

「は…??」

いつも俺を呼ぶ沖田夕紀の声は大きすぎて、俺を引き止める。

「前からずっと…。」

俺がそれを拒否する権利はない。

けど、

「ごめん…」

拒絶しなければ俺は壊れてしまう。

大切なものを失うのはもう嫌だった。

俺の時計の針はまたあの時の時刻をさしたまま止まってしまった。

## 【第四章】（後書き）

次回、最終章です。

## 【最終章】

### 【最終章】

取り返しのつかない過ちをしてしまったら、どのように償えばいいんだろう。

幸せなんて俺には似合わない。

そう言われてる気がした。

「紅輝っ！！夕紀ちゃんが…」  
バサッ。

俺は体をすごい勢いで起こした。

「夢か…。」

そして俺はハアとため息をついた。  
時計を見るとまだ夜中の3時だった。  
パタッと倒れるとまた眠りについた。

それから毎晩夢を見た。

「紅輝っ！！沖田さんが大変だって…」  
うそだ。

「紅輝っ！！沖田さんが屋上から…」  
ウルサイ。

「紅輝っ！！夕紀ちゃんが飛び降りた…」  
やめろ…！！

「またこの夢…」

俺の日に日にだるくなっていく体は家族を心配させた。

葉太が俺の顔をのぞき込んでいた。

「紅輝…。最近顔色悪いけど…」

「…夢見る。」

「え…？どんな？」

瑞樹もその場にいるが相変わらず気まずいままだった。

何も言わずただこっちの話を聞いていた。

「沖田夕紀が…飛び降りる夢。」

「え…それってもしかして…」

「当然なんじゃない？沖田さんに仲良くなれないって言ったんでしょ」

「は？何で知ってんだよ」

「沖田さんから聞いた。…紅輝はこのままでいいの？？」

「どういう意味かわかんねえんだけど」

「沖田さんと、このまま気まずいままでいいの？って。」

…俺はどうしたい？

沖田夕紀と仲良くなりたい？

きつと、そばにいられない理由なんてない。

「…でも俺には幸せになる権利なんてない」

「紅輝…。」

「…」

「過去は過去でしょ。前に辛いことがあったから今幸せになっちゃいけないなんて誰が言ったの！？紅輝には幸せになる義務があるんだよ…！！」

「え…？」

「西園寺さんだってそれを望んでるんじゃないの？？俺だって、紅輝には幸せになってほしいよ…」

俺は立ち上がった。

「ありがとな」

そばにいてくれてほんとよかった。  
心の底からそう思った。

「西園寺紫乃…。懐かしいね。」

「あれから3年か…。紅輝もそろそろ変わらないといけないうね。」

「夕紀ちゃんがいるし大丈夫じゃない??」

「そうだね…」

俺は走った。

あの背中を探して。

あの笑顔を…。見たい。

あの黒髪に…。触れたい。

あの声が…。聞きたい。

沖田夕紀に…。会いたい。

「沖田…っ」

「え…??」

振り返った顔が何故か懐かしかった。

「今さらだけど…。俺…。お前と仲良くなりたい。」

「うそ…!??」

「ホント。」

「だって紅輝くんあたしのこと嫌いなんじゃ…」

彼女の頬に涙が伝った。

「別に、嫌いじゃないわけじゃなかったよ。」

「まわりくどっ。わけわかんないよ…」

沖田夕紀はその場にしゃがみこんでしまう。



「素直じゃなくてごめんな」  
ただそれだけが言えなくて。  
でもそれだけが言いたくて。  
素直じゃなくてごめん。  
伝えられなくてごめん。  
知ろうとしなくてごめん。  
君に、会えた喜びが俺の枷を外したんだ。  
これからの今を忘れない。

「許さない…」

「は??」

しゃがみこんだまま沖田夕紀は笑っていた。  
俺もそれにつられた。

「沖田夕紀…俺な、」

「ちょっと待った」

沖田夕紀は話そうとする俺の言葉を遮った。

「その沖田夕紀ってやめない？」

「は…??今さら??ムリだし。」

「さつき沖田って呼んでたじゃん」

「あれは勢い…」

キンコーン…

チャイムが響いた。

結局また何も話せなかった。

だけど、がっかりしている半面、ほっとしていた。  
話したくない、そんな自分が俺を止めた。

予鈴を聞いた俺たちは教室に戻った。

「仲直りしたんだー」

俺たち二人を見て、瑞樹や葉太は声をそろえた。

「よかった…。」

「葉太、ありがとな」

これまで葉太と瑞樹には迷惑ばかりかけていた。  
特に葉太は心配していた。

「ほんとに迷惑かけてごめんな」

「気にしないでよ。俺の幸せはみんなが幸せでいることだよ…。」  
俺はもう、独りじゃない。

そばにいてくれるコイツらがいる。

でも

コイツらを失ったら俺は

一体どうするんだろう…？

「紅輝…？」

俺を呼ぶ声。

これが聞こえなくなったら俺は  
普通でいれるだろうか。

「ごめん…」

俺は教室を出た。

「紅輝もいろいろ複雑なんだよね」

「うん…。よく夕紀ちゃんと仲良くなれたよね」

「え…？どういこと？」

2人は顔を見合わせた。

「紅輝は…、女の子に近づくことはなかったんだよ。」

「え…？何で…？」

「仲良くなつて好きになるのが怖かったから、かな。」

屋上の扉を開いた。

秋の風が頬をすべる。

爽やかな秋晴れの青空が何かを吸い取る。

俺は寝そべってただ空を見上げていた。

ただ…空を…。

「紅輝、中2の頃好きな女の子いたんだよね。その子も紅輝のこと好きだったんだけど…」

「紅輝もその女の子もモテてたから女の子はいじめられて…。紅輝は女の子を守ってたんだけど、紅輝もいじめられてストレスが溜まってたんだろうね。少しずつすれ違い始めて、ある時紅輝がその子のこと殴っちゃったんだ。」

「女の子は嫌われたと思ったんだと思う。それに、いじめられてたのもあったし…そのあと学校の屋上から…」

「…っ!!」

紫乃…

俺は…幸せになる資格なんてあるのか…

「紅輝はそれからずっと気にしてて…。その子の遺書に『誰も責めないで。これは私自身が勝手にやったことだから。後悔なんてしてないよ。ただ、紅輝くんの足を止めてしまっくんじゃなかったことが心配です』って書いてあったもんだからいたたまれないような気持ちになっちゃって…」

紫乃を守れなかった俺に沖田夕紀と仲良くなる資格なんてあるのか…？

「紅輝くんっ!!」

息を切らせた沖田夕紀の声が聞こえた。  
振り返ってびつくりした。

沖田夕紀の頬から大きな雫がこぼれ落ちていたことに。  
自分の頬を一筋の水が伝ったことに。

「沖田夕紀…?」

「紅輝くん…。瑞樹さんと葉太くんから聞いたの。悲しい過去があったのに、あたし、近くにいてもいいの…?」

「…俺の話を?」

「うん…。」

「…俺は沖田夕紀だからいいと思った。」

「その涙はピリオドだと思っていいの…?」

「…いいんじゃないの」

終わりがあつけなくて

胸から空虚感がぬけなかった

周りが話しているのを聞いて

初めて失ったことに気づいた

実感がわかないのに怒りだけがこみあげて

涙がぼたぼたこぼれ落ちた

その時命の重みを知った

あふれる涙が二度と帰ってこないと思い知らす

儚く散っていったあの子の代わりを

きつとずっと求めていた

でもあの子の代わりなんていなくて

自分が変わらないといけなくて

だから俺はずっと

背を向けていた

君に会えてよかった

君を…好きになってよかった…

「あたしはずっと紅輝くんのそばにいるから…」  
「ありがとう…」

「雨だね…」

瑞樹がぼつりと言った。

「傘持ってきてないよ」

「お前は彼女にいれてもらえよ」

俺はそう言つと葉太の背中を押した。

「あー！俺さあ、今日委員会だから先帰つてて。」

「ああ…わかった」

「じゃあばいばーい」

何でこう必然的に一緒に帰ることになるかなあ。

「沖田夕紀は傘持ってきてるんだよね？」

「え？紅輝くんが持ってきてるんでしょ？」

・・・！？

「この大雨の中帰れって…？」

「…」

冷たい…

あんな晴れてたのに…

「紅輝くん…ごめんね」

「あんたは悪くないよ…」

沖田夕紀が交差点で信号が変わるのを待つ。

俺はここでまっすぐ進む。

「紅輝くんっ」

この声が俺の足を止めなければ。

「昼間言いそびれてたんだけど、あたしっ紅輝くんが好きっ……」  
信号が色を変えた。

沖田夕紀は走り出す。

「夕紀っ……」

一回しか言わないから……

聞いて……」

沖田夕紀は横断歩道の真ん中で立ち止まって振り向いている。

あたりは雨音だけが響いている。

彼女の頬を伝っているのは雨……？

それとも……

「俺……」

言いかけた時だった。

急に暗闇が眩しいライトで光りわたった。

ものすごい勢いでトラックがつつこんでくる。

俺はもう大切な人を失いたくない。

直感的に思った。

紫乃を失い閉ざしてしまっていた扉を開いたのは君だった。

そんな君がいなくなるのは嫌だと心から思えた。

止まっていた時間を動かす術を俺はもうきつと知ってる。

ププー……

クラクションが響く。

俺は走り出して沖田夕紀の背中を突き飛ばした。

これで良かった…  
これで…

「紅輝ーっっ！！」  
彼女の叫び声は虚しく響いていた。

「紅輝っ…！！紅輝っ…！！」  
俺を呼ぶ姉や母の声が遠くで聞こえる。  
だけどその声も次第に聞こえなくなつた。

黒と紫の渦が俺を取り巻いた。  
紫乃…  
お前を死なせたのは俺…

だけど…  
そんな俺でも幸せになつていいのか…

胸が苦しい。  
締めつけられるような衝動に襲われた。  
熱い…  
張り裂けそうだ…

「あなたが夕紀ちゃん…？」  
「…え？」

紅輝の母親が夕紀に話しかけた。  
「気にしないでね。あの子バカだから。あなたを守りたかつたんでしょうけど、ただのバカだよ…」  
そつという母親の目には涙が浮かんでいた。

「意識不明の重体…!?!」

「…うん」

「うそ…」

「あたしのせいだ…。どうしよう…!?!」

夕紀はその場にしゃがみこんだ。

「沖田さんのせいじゃないよ…」

「そうだよ。紅輝は自分の意志で夕紀ちゃんを助けたんじゃないかな。」

それから夕紀は一週間病院に通った。

秋の風が病室の白いカーテンを揺らしている。

夕紀は紅輝の病室を覗いた。

そこには座っている人影があつた。

「紅輝…っ!?!」

夕紀は走りよった。

紅輝がゆっくりこつちを振り向く。

「!?!」

夕紀は直感的に違和感を感じた。

「紅輝…。それが僕の名前ですか…?」

「え…?うそでしょ?」

「すみません。でもなにも覚えてなくて…」

「…え?あたしのことも…?」

「…はい…」

「嘘でしょ?!嘘だつて言つてよ!?!」

夕紀は珍しく取り乱し、涙を流していた。

そして夕紀は耐えきれず病室を飛び出した。



なんだろう…

心に開いたこの大きい穴は。

あのヒトを泣かしてしまった…

ただそれだけがすごくいけないことの気がした

何か大事なものがスポツと抜けているような気がする

「ねえちいちゃん…」

夕紀は知南に話しかけた。

「もし…大好きな人が自分のことを覚えていなかったら…どうする？」

「…ええ？それでもそばにいたい理由なんて好きだからじゃだめなのかなあ…？」

「…」

「早く行つてきなよ。好きなんですよ…？」

もう何も迷ってない。

ねえ紅輝くん…

あなたに会えてよかった

たくさんの思い出ありがとう

記憶の中に私がいなくても

これから重ねていけばいいよね

もし生まれ変わったら

ほかの誰でもなく

あなたと出会って

あなたにまた恋したい

あなたを好きと言いたい

出会えて良かった

なんて大げさだけど

心から思える自分がいたよ

「紅輝くんっ…」

窓の外で、差しこむ秋色の光が風に揺れるもみじを輝かせている。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4263n/>

---

秋色のもみじ

2011年10月7日22時29分発行